

鉄板屋『龍驤』プロト タイプ

モチセ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

お、お客様新顔やな。鉄板料理ならなんでもござれの鉄板屋「龍驤」やで。ん?
ああ、ウチな、移動販売車で営業してんねん。まずはスタンダードにお好み焼きでもど
うや?

いらっしゃい。鉄板屋「龍驤」や。

店構えてやることにしたんや。メニューは変わらんし、いつも通り頼んでつてや。

息抜きで営業しとるからな、開店は不定期やし、閉店も不定期や。適当に作ってる上、

味見もせずに完成後即提供やから、味にばらつきが多いで。そこんとこ注意したつて
や。

（息抜き投稿や。投稿は不定期やし、更新停止も不定期や。適当に書いとる上、見直しも
せんで即投稿やから、文章が安定せえへん。そこんとこ注意したつてや）

再構成したリメイク版を投稿しました。

こちらの設定が合わない方はそちらの閲覧をお願いします。

目
次

鉄板屋

「龍驤」プロトタイプ

1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
87	78	69	61	53	47	40	32	23	9	1	

鉄板屋「龍驤」プロトタイプ

01

／＼＼＼＼あつさでつすあつさでつすあつさでつすヨオオオ

「ん＼＼＼＼やかましいなあ＼＼＼＼」

＼＼＼＼＼あつさでつすあつさでつすおつきまつショオオオ

「やかましいわボケ」

耳元で鳴り響くやかましい目覚ましを叩いて黙らせ、布団から這い上がる。とりあえず洗面所まで行つて、顔を洗い歯を磨く。ボツサボサの髪の毛を整え、いつもの髪型にする。それから寝室に戻り、枕元においてあるいつもの服に着替える。

「……まあ間に合うやろ」

家から出てガレージへと向かう。ガレージにおいてあるのはごく普通の軽トラと、赤く派手に塗装されている改造車の2台。ごく普通の軽トラへと乗り込み、エンジンをかける。

「行くで」



魚市場。クーラーボックス片手に練り歩く。

深海棲艦が現れてからは、安全が確保された海域でしか漁が出来なくなつた。逆に言えば、安全な海域では漁が出来るのである。以前は開かれること自体が珍しかつた魚市場も、ある程度海を取り返した今ではそれほど珍しくない。

つまり、値段はそれ相応までに下がつてゐる。

「おっちゃん、タコ」

「まいど。イカは買つてイカないの?」

「そうしたいところなんやけど、今日は気分やないわ」

「スルーか、残念だなー。というか気分で決めてるのか?」

「そんなもんや。ウチにとつては趣味やしな」

いつものところでいつものものを買い、いつものように軽く会話する。この光景が『いつもの』になるまでは結構時間が掛かつたものだ。常連になるまで時間が掛けたんやなあとしみじみ考えていると、なにやら騒々しい声が聞こえてきた。

「くおらあああ！ またんかあああああ！」

「待ツ奴ガドコニイルンダアア?!」

肌の色が限りなく白に近い少女が逃げ、それを年寄りのじいさんが追いかける。

少女は黒い水着の上に黒いパーカーを着ただけの、海水浴に来たような少女だ。しかし、他の人と決定的に異なる部分がある。尾てい骨付近から太いしつぽみたいなものが生えており、その先端には禍々しい雰囲気をかもし出す黒いナニカ。

——簡単に言えば、人類の敵、深海棲艦レ級がそこにいた。

「……またやつてるんかあいつは」

「相変わらずやかましいな」

「何をしてかしたんやろか」

「知らねえよ」

しつぽにある禍々しいナニカの口にタコがくわえられている。おそらく盗つていつたのだろう。人とは思えない速度で魚市場を駆け抜けていく少女。それを同じ速度で追いかける老人。漁師つて元気なんやなあと考えるのをやめていたりする。

「相変わらず信じられへん光景やわ」

「そうか？」

「初めて見たときは恐怖しか覚えんかったわ。なんでこんなところにおるんやろうなつてな」

「そうか？」

「……深海棲艦つて分かるか？」

「人類の敵だろ？」

「じゃああそこにいるのは？」

「レツちゃん」

「……そうやな」

初めてこの魚市場でレ級を見たときは無意識に戦闘態勢に入っていた。艦娘を引退しても体は覚えているものだ。しかし、ここで近くにいたおつちゃんがどうして彼女に敵意を向けるのかと聞いてきた。そら深海棲艦や、ウチ等の敵やと答えた。そうしたらおつちゃんに「レツちゃんが深海棲艦なのは分かつた。なら、敵だという証拠はどこにある？」と言われ、言いくるめられたのだ。

『敵ならば誰かを襲っているはずだろ？　しかし、そうしていない以上は敵ではない。まあそうカツカスんな、タコでも買つてけ』

今思えばこの出来事が常連になるきっかけになつていたりする。とても微妙な気持ちに襲われた。

「でも割と迷惑かけとると思うんやけど」

「問題ねーよ、だつてレツちゃんは工藤のじいさん（先ほど追つていった老人）の弟子だからな」

「初耳なんやけど
教えてないからな」

クツクツクと笑うおっちゃんを尻目に、これを鎮守府の皆に教えたらどういう反応するんやろうなと考えていた。電あたりに教えると面白いやろなと想像を膨らませていると、あたりでドタドタといつてた足音が大きくなる。大方こちらにあいさつをしに来たのだろう。振り返ると予想通り、レ級だつた。

「オー、リュツチー、オヒツサー！」

「一日ぶりやけどな。じつちやは？」

「息切レ起コシテタゼ、ヤッパ年寄リハ無理シチャイカニヨ」

「無理させどんのは何処のどいつや」

「アタシヤナー」

「無理させんといでや」

「考エトクー」

レ級はそういうと、騒動の始点である工藤のじいさんのスペースへと戻ろうときびすを返す。その直後、何かを思い出したかのように振り返り、タコを入れていたバケツにしつぽでくわえていたタコをボトツと落とす。

「コレサービス」

「いやあかんやろ」

「サービス料金50000円イタダキマース！ アリガトウゴザマース！」

「随分とぼつたくるな！」

「買ツテクレナイノ？」

「上目遣いやめーや！」

なんだかんだいいつつも、買つてしまふ。幸いお金には困つてないし問題もない。

＼＼＼＼

師匠のお言葉その1

シメる時はワンパンで

『バカヤロー！ 2mm左にずれてるぞ！』

『そこまで細かくやらんとあかんの?!』

『もう一回やり直しだ！ 現在進行形でタコ漁しているウチの時雨に迷惑かけんじゃねえ！』

『何で艦娘にタコ取つてきてもろてるんや!!』

『うるせえ！ 遠征任務だよ遠征任務！』

『んな遠征聞いたことないわ!!』

『サンマはあるだろ!』

『ないわ!!』

〜〜〜

「あーしんど」

家へと帰り、タコを捌いて加熱処理。今日はたこ焼きの気分である。

「ほな行くで」

加熱処理を済ませたタコとあらかじめ作り置きしていたタネを持ち、ガレージへと向かう。次に乗る車は赤い改造車。

「あかん、忘れとつた」

材料を積んだあと、トレードマークともいえる暖簾を積んでいないことに気がつき、ガレージの端においてある暖簾を車に積む。

そのあと全ての材料と器具を確認してから、今日の営業場所を適当に決める。

「ほな行くで」

とりあえず鎮守府に行けばええやろと考えつつ、車のエンジンを掛けた。

鉄板屋『龍驤』。店長である龍驤のきまぐれでメニューが変わる鉄板屋。

あえて移動販売にしたその鉄板屋は、今日も元気に鎮守府へと向かう。

とある鎮守府の近くに車を止め、たこ焼きを作り始める。移動する鉄板屋が基本的に営業する場所はここだ。ターゲットはもちろん艦娘。元々いた身としては様子を見たいというのもあるが。

ある程度焼けたたこ焼きを適当にひっくり返していると、とてとてという足音とともに、1人の艦娘がやってきた。

茶髪の髪を後ろで束ねた駆逐艦の艦娘、電である。

「龍驤さん、屋台はやらないのですか？」

「開口一番それかいな」

せめてその前にたこ焼きひとつと言つて欲しかつたと頭の中で思う。まああとで買おうだらうけど。

「一度屋台で鉄板料理を食べてみたいのです」

「屋台を調達するどこから始めなアカンな」

そういうと電はパアアつと笑顔になる。もう彼女の中では屋台をすることが確定しているのだろう。

屋台か、たまには悪くないと考えつつ、たこ焼きをピックで転がす。

「あとはびーるも呑んでみたいのです」

電の言葉に思わずピックを落としかけた。アカンアカン、集中せなアカン、やないと師匠に叱られてまう。

どうにか平静を取り戻したあと、どうしたのかを訊いてみた。

「仕事終わりのビールは世界が変わるぞつて提督が言つてました」

「あんの野郎余計なこといいおつて……」

法律上、20歳未満の飲酒は禁止されているが、艦娘だけは例外的に認められ——いや、黙認されている。

艦娘は人間と体の構造が違うらしく、アルコール耐性が高いらしいからなんとか。兵器扱いされているからという説もある。まあウチらには関係ないことやな。

ある程度海を取り戻したものの、未だに深海棲艦との戦争は続いている。どこまでいつたら終わりなんやろなと思いつつ、焼きあがつたたこ焼きをパックの上に載せていく。

「……ダメですか?」

「そう言われたら断れんわ。検討してみるで」
上目使いされたら断るに断れんわ。

焼きあがつたたこ焼きに適当にマヨネーズとソースをバーツとかけ、青のりやその他もろもろを振り掛ける。最後に爪楊枝をさして輪ゴムで止めてはい完成。

「……艦隊には戻らないのですか？」

「戻るも何も……」

電に出来上がつたたこ焼きを渡し、左腕の袖を上げる。

そこには本来の肌色ではなく、灰色や黒色になつてゐる腕。そして、どこか機械っぽさを感じる——簡単に言えば、義手だつた。

「この腕はアカンやろ」

自虐的な笑みを漏らし、袖を元に戻す。そうしないと腕を見られたときに同情の目線を向けられるのだ。

魚市場の人からそういう目線をあまり向けられたことはないが、やはり向けてくる人はいるみたいだ。

「…………」

「どないしたんや？」

「治らなかつたのですか？」

「治らへんかつた」

「……そうなのですか」

次のタネをたこ焼き専用の鉄板にたらしていく。そのうち電以外の誰かが来るやろ。「流石に腕が吹き飛ぶとは思わんかつたでー。戦艦の砲弾が直撃してもボロボロになるくらいやつたのになー」

「どうしてそうなったのですか?」

「簡単に言えば突然変異——おつと、誰か来たみたいやな」

向こうからこちらに向かつて走つてくる影を捕捉。工具箱を持つてこつちに来てると言うことは……夕張やろか。

「りゅーじょーゼーん! 来てたんですねー!」

「いつつも来てるけどなー」

「今日こそガトリングにさせてくださいーい!」

「お断りや」

近くまで駆け寄つた夕張は工具箱を置き、目をキラキラさせながら話しかけてきた。
あ、これいつもの長くなる奴や。

「いいじやないですかガトリング! こう、ガガツとなつてンボつてなる感じが!」

「ンボつてなんやンボつて」

「龍驤さん、せつかく龍驤つて名前があるんですからこの際関西の龍を名乗りましょう

「いずれ関東の龍にやられるからお断りや」

夕張に押し付ける用のたこ焼きを準備する。ついでに明石、妖精さんの分も準備するで。

「天龍に関西弁みたいな言葉を教えてるんですよ！ 完璧ですよ完璧！」

「木曾でもええやん」

「キヤラが壊れるんでダメです」

「天龍はええんか」

「いいんじゃない？」

「相変わらずあいつかわいそうやな」

「この間イ級に肩噛まれましたからね」

「何があつたんや……」

まじ……関西弁を話す天龍なんて全然想像でけへんな。それにしてもイ級に肩を噛まれるってどういう状況なんやろか。そこまで接近したこと驚きだし、イ級がどうやって噛み付いたのかも気になる。そもそも噛み付くんかあいつ。飛ぶとこすら見たことないわ。

「あ、あの」

「あー、すまん、空気にさせてもうたな」

電を置いてけぼりで話を進めていたのを忘れていた。

考え込んでたみたいやから気にするべきか気にせんべきか迷つてたんやけど。

「まーあれや。ウチは楽しくやつとる。これが答えや」「……そうなのですか」

「そのたこ焼きはサービス……いや、夕張持ちや」

「ちよつ、ひどくないですか龍驤さん！」

「ありがとうございます！」

「えあつ…」

電の満面の笑みを正面に捕らえてしまつた夕張は、変な声を出しつつそっぽを向いた。ドンマイやな。ウチもそれ喰らつたら耐えられんわ。というか電は絶対分かつてやつていい。切り替えの早さがそれだ。

またなのですが去り際にしゃべつた電は、鎮守府へと戻つていつた。

「まー騙されたと思うんやな」

「けしかけたのは龍驤さんですけどね」

「悪くないやろ」

「悪くないかも」

「ということでこれ明石と妖精さんの分や」

「あれ、私の分は？」

「はよ持つてき、冷めてまうやろ」
「私の分は!?」

~~~~~

## 師匠のお言葉その2

じょうれんだいじに

『龍驤！ 常連は大事にしろよ！』

『へい！ 師匠！』

『常連さんと仲良くなることで新たな客が来たり、新商品のアイデアが生まれることがある！』

『ゲームっぽい説明やな！』

『何より常連さんは定期的に金を落してくれる金づるだ！ 基本的な収入源様だぞ

！』

『師匠！ 最後で台無しや！』

~~~~~

「龍驤さん、あるたこ焼き全部ください！」

「ダメや、他の人のことも考えろや」

「いつそのことタネだけでもいいですよー！」

「どうやつて食うんや」

「冗談ですよ、5パックください」

「それでも多いんやけどな」

「ちゃんと準備してるんでしよう？」

「当然や、持つて行き」

「龍驤さん、たこ焼き全部ください」

「お前もかいな」

「当然です、赤城さんが買うなら私も買います」

「全部は買ってないで」

「なら半分で」

「後ろみような」

「……空母しかいませんが」

「お前等食い意地張りすぎや！　自重せや！　あと赤城！」

2周目は許さんで！

鎮守

府に帰れや！」

「赤城さんが5パックで足りるとでも？」

「足りないことぐらいわかつとるがな！」

「龍驤さんなら準備してると思っていたのですが」

「当然やないか！ 毎回やられたら学習するわ！」

「ツンデレですね」

「食べるのやめたらええんや！ ウチの手間考えーや！」

ほれ！

これで全部や！」

「りゅーじょー！ 1パックちょーだーい！」

「あ、島風か。ほれ、持つてき」

「ありがとー！ じゃーねー！」

「あ！ お代！ お代忘れとるで！」

「次来た時払うねーー……」

「まあそれでもええんやけど」

「あーしんど」

食うボの襲撃を乗り越え、一息つく。

もしかしてこれブラツクやん？ と考えつつ、適当に作つたこ焼きを口の中へ運ぶ。

常連が常連を呼んだ結果、食うボが大量に押し寄せてきた。これはいい結果なんやろか、師匠。ツケでいつた島風が天使に見えるで。

「……やっぱ師匠には及ばんないなあ」

「お疲れ様なのです」

ベンチでたそがれているとどこからか電が現れた。その片手には缶コーヒーを持っている。

「差し入れなのです」

「おおきに、助かるわ」

プシッと開けて一気に飲む。一息つくタイミングでのコーヒーはなかなか悪くない。

「屋台か……こ」まで持つてくるのツライで

「鎮守府に置けば解決なのです」

「迷惑かかるやろ」

「おそらく空母の方が管理すると思うのです」

確かに食べるためならやりそうやな。でもウチとしては皆に食べて貰いたいんやけど……

そんなことを考へていると、電がいきなりまじめな顔つきになつてこちらを見た。

「龍驤さん、皆さんに会わないんですか？」

「会つてやん」

「鎮守府に顔を出しに来ては……」

「逃げ出した身やからツライで」

「逃げ出した訳じやないですよね？」

義手を上げて力をこめてみるが、指先に炎は現れない。

「コレが答えや」

「答え？」

「ウチは指先の炎で式紙を艦載機に変えるタイプなんや。それが出来ない以上は砲撃しかでけへん」

「…………」

「それに航空戦力も足りてたしな。引き際としては十分なんや」

アドバイザーという選択肢もあつたにはあつたんやけど、それすら必要ない感じやつたからな。この鎮守府がそこまで成長したと思うと感慨深いものがある。
……ちよつと空気が悪いで。あの話でも出してみよか。

「せやなあ……魚市場は知つてるんか？」

「魚市場つて……あのですか？」

「せや、魚とか海産物売つてる奴や」

「それがどうかしたのですか？」

「そこに深海棲艦がおつたんやけどな」

「?」

「知り合いのタコ盗つて逃げてたわ」

本当は師匠と弟子の関係らしいんやけど、ウチですら衝撃が大きかつたから話すのは
やめとこか。

「だ、大丈夫なのですか!?」

「たびたび起こつてることやから気にするだけ無駄や」

「深海棲艦の方なのです！」

「あ、その深海棲艦はレ級つていうんやけど」

「はわっ!」

唐突に電が氣絶した。アカン、流石にこの話は衝撃が強すぎた様や。逆に言えば氣絶
するくらい衝撃的なお話なんかコレ。

それにも関わらずマズイような気がしてきた。こんなとき頼れる存在がい
たようないなかつたような……。せや、アレを呼べええんや。

「青葉」

「呼びました？」

車の下からニユツと登場したのは重巡洋艦の艦娘である青葉。鎮守府内で出る新聞は彼女が書いている。それはいいとしていつから車の下にいたのか疑問だが、青葉の行動は考えるだけ無駄なので考えないようにしている。

ホラー系の映画を見ているときに天井の板から顔を出して驚かせたあの瞬間は忘れへんで。

「電が倒れたんやけど」

「そりやあんな話すれば大体の艦娘が倒れますよねえ」

「聞いてたんか」

「もちろんですとも！」

「どこから？」

「義手を電ちゃんに見せたあたりからです！」

「相当前からそこにいたんやな」

「驚かないんですか？」

「驚くだけ無駄やわ」

青葉、裏でなんて言われとるか分かるか？

忍者やで忍者。ジャバニーズニンジャや

で。

ウチの反応にため息をついた青葉は、自身のメモ帳をパラパラと流し読みしていた。

「とりあえず今週の見出しは空母に蹂躪されるたこ焼き屋にしましょう」

「鎮守府の新聞やないんか」

「ということで店主から一言」

「お前等食いすぎや」

「ありがとうございました」

「あ、さつきの話は口外するんやないで？」

「ええ、口外しませんとも。」

オリヨクルの面子が深海棲艦と飲み会しているくらい隠さなきやいけない話ですか
らね」

「ちよつち待て、今何言つた」

「サラバワレアオバ！」

「逃げるなや青葉！ 今の話ちよつち聞かせてもらうで！」

主にレ級に遭遇したときの対処のためにも。

今日も元気に鉄板屋は走る。

営業を終え帰宅。

メンテナンスを終わらせると既に外は暗くなっていた。

「あーしんど」

移動販売車や屋台はメンテが大変である。いっそ店を構えるのもありやな、ガソリン代もかからんし。

「店か屋台か……」

どちらも簡単ではない。家から鎮守府までは近いわけではない以上、屋台の移動はそれなりに時間が掛かる。かといって店を構えるとしても、建物が必要である。

「すぐ準備できんのは屋台やな」

お金に余裕はあるけどあまり使いたくはない。ダメ元で魚市場のおつちやんとかに聞こう。もしかしたら手に入るかもしねない。

そもそも一から作るのはどうやろか。そーなると明石や妖精さんあたりに頼むのがええな。

「アカン」

魔改造する未来が見えてもうた。そもそもこの義手も明石や妖精さんが作ったモノや、微妙に信用できんわ。

この義手はウチの思いどおりに動いてくれてるんやけど、どういう機構なんやろか。もしかしたら、夕張の言うとおりガトリングになつたりしてな。

「……はえ？」

突然義手から変な音が出る。ガシンガシンといったような音だ。もしかしてウチが変なこと考えたからなんか？！

袖をまくつてみてみると義手は変形を開始していた。そして数秒後、ただの義手だった左腕は。

「…………」

ミニガンを模したガトリングアームとなつていた。

拝啓、師匠へ。ウチは関東の龍にブツ飛ばされるんや。

★

翌日。いつもの魚市場。

そもそも明石や妖精さんに頼むのはアカンと思い、ここの人たちに訊くことにした。
あくまで趣味の範囲内やしな。

「なあおっちゃん、屋台持つてたりするん?」

「どうした急に、とりあえずタコ買え」

「おっちゃん以外でもええで」

「屋台に関しては工藤のじいさんぐらいだな。あとタコ買え」

「あんがとな!」

「礼を言うならタコを買え!!」

タコを執拗に押し付けようとするおっちゃんから逃げ、じつちゃんの場所へ向かう。

じつちゃんところは他の人と違い養殖業だ。何でも歳だとか。

じつちゃんの場所へ到着すると、いつものじつちゃんではなくレ級が店番をしていた。

「リュッチーオツスオツス」

「あれ、じつちゃんはどうしたん?」

「腰ガ碎ケタ」

「アカンわ」

「冗談ダゼ、何力用カ?」

「使わない屋台持つてゐるか訊きたかつたんやけど」

「ソンナン訊クダケ無駄ヤロ」

「そか」

そもそも屋台を持つてゐる人が少ないんやけどな。このご時勢やし。買うのも癪だし魔改造されてもいいから明石にでも頼むとしよう。

今日はお好み焼きの氣分やしイカでも買つてこか。

「マー、アルンダケドサ」

レ級の言葉に歩みを止める。確かにないとは言つてないな、ハハハこやつめ。いや、そもそもなんであるかどうか知つてるんや。

「弟子ダカラ」

「なんで屋台持つてゐるねん」

「ンー、ゴ都合主義ダカラ?」

「……ウチもそうとしか思えんわ」

「今日師匠ガイナインハドコカニ屋台ダシニイクカラナンダケドサ」

「使つてゐんかい!!」

コイツはどこまで振り回せば気が済むんやろか。でも使つてゐるならしゃーないな。

おっちゃんいわく工藤のじっちゃん以外いないみたいだし、やっぱり明石に頼むしか
ないか。

「マーマー元氣ダセヨリユツチ、ソンナンジャ胸モ大キクナラナイゾ☆」

「これはもう諦めたからええんや」

「諦メンナヨ!! ドーシテソコデ」

「やかましいわボケ」

一発チヨップをかます。が、しつぽにガードされてしまった。

「アメーテ」

「反応速度ヤバいな」

「……リユツチ、オメーノイタ鎮守府ツテドコダ?」

「……なんで教えないとアカンのや」

「ドーセ1番近イ鎮守府ヤロ?」

「それを知つてどないするんや」

「簡単ダゼ、屋台出シニ行クダケダ」

「へ?」

「ダイジョーブデース、制服着レバドー二カナリマース!」

「い、いや、なんともならんやろ」

「ソカ、リユツチノ後追ツカケテイケバエエヤン。レツチヤン天才?」

「そもそも来んなや、キミ深海棲艦やろ」

「ソンナ！ ヒトイ！ 私ト龍驤ノ仲ナノニ！」

「知らんわ」

なんか今日は嫌な予感がする。おつちやんのところでイカを買ってさつさと営業しないこか。

／＼＼＼＼

師匠のお言葉その3

同業者は大切に

『龍驤！ 同業者は大切にするんだぞ！』

『商売敵の類やないんか？』

『お互い切磋琢磨することで自身の成長にもつながるぞ！』

『それは盲点やつたわ！ さすが師匠や！』

『ただし焼き鳥屋は潰せ！』

『なんでや！』

『再起不可能になるまで叩き潰せ！ 屋台をぶつ壊しても構わん！』

『焼き鳥屋に何の恨みがあるんや！』

『客を半分取られたからだよ！ あいついつも俺と同じ場所狙つてくるんだよ！』
『私怨ダダ漏れやないか！』

ヽヽヽヽ

鎮守府付近。

「キチャツタ……！」

「ホンマに来んなや！！」

「ワインジユウヤ！ エエヤヂ！」

「良くないわ！ 帰れ！」

「リュツチガホツポニ！」

「うつさい！」

鎮守府の近くに赤い移動販売車が止められているいつもの光景に、新しく屋台が追加された。

ここまで持ってきたであろう張本人であるレ級は、割烹着のような服に身を包んでいた

るためか深海棲艦特有の禍々しさが感じられない。そもそもしつぽはどこへ行つたんや。

「ここ車でも30分かかるんやけど?」

「工、走レバ30分デ着クダロ」

「訊いたウチがアホやつたわ。で、何の屋台なんや?」

「焼キ鳥ヤデー、居酒屋モ兼ネテルラシイゼ」

「時間帯間違えたんやないの? まだ昼やで?」

「来ル奴ハ来ルカラ問題ネーヨ」

「その自信はどこから来るんや」

なんか帰りそうにないし次々焼いてるし……もう放つとこ、知らん。今日はお好み焼き。ウチも焼き始めるとするか。

「いいか、変なマネはするんやないで」

「モツチーノローン」

「……信用できんわ」

「レツツアン、ウソ、ツカナイ」

話しながらも手を止めないレ級。その速度はどこか師匠を髣髴とさせる。

でも師匠は粉物以外壊滅的やから仕込んだのは師匠やないやろ。もしかして工藤の

じつちゃんは師匠レベル？　あ、そういえば。

「そういうやじつちゃんはどうしたん？」

「コレ、奪ツタ、後、知ラン」

「あの人も災難や……その服は？」

「使ツテナイ部屋ノタンスニアツタ。似合ウ？」

「たぶんそれ使っちゃアカンやつや。あと似合つてへん、微妙や」

「ヤツパリパーク一ガ1番ダヨ」

正直深海棲艦というところを見ると帰つてほしいんやけど、空母の奴等を考えると残つてくれたほうが助かる。

ここまで来たらもうあれだ、ただの同業者と考えよう。これ以上考えると胃に悪い。
「バレへんか心配や」

「問題ネーヨ。シツポハ置イテキタ」

「あれ着脱可能だつたんか」

鉄板屋は今日も元気に営業する。

〇四

「龍驤さん、店を構えませんか？」

「急にどないしたんや」

営業を始めて数時間。空母の襲撃に耐えられなかつたレ級は帰つてしまつた。逆にこつちは空母があつちに行つてしまつた分の材料が余つてしまつた。

それでも売れてる方なんやけどな。あいつらの食欲がおかしいだけや。普通やつたら1時間で材料なくなるわ。

今現在、昼の休憩に入つた工廠の方々が来店している。具体的に言えば夕張と明石だが、夕張は妖精さんにお好み焼きを持つて行つてる最中だ。よつてここには明石だけ。そして、明石が何故か店を構えようといったところで冒頭に戻る。

「隣の焼き鳥屋に客を取られてるじやないですか」

「ウチは空母が分散するから万々歳なんやけどな」

あまりのオーダーの多さにレ級が泣いていたような笑つてたような表情をしていたことを思い出す。あの猛攻に初見で泣かない奴なんておらんわ。ウチは初見やなかつたから最初から対処してたんやけどな。

「酒が飲めるのと飲めないのでは大きな差があります」

「そこかい、というかなんで知ってるんや」

「加賀さんが話していたんですよ。あと、屋台だと座れるという強みもありますね
なんでもビールサーバが屋台の下の方に隠してあつたのを発見したとか。飲みの方
も潰す気なんかお前等。」

「そうだ！　じやあ龍驤さんも屋台にしましょう！」

「なんでや」

「そうと決まれば早速妖精さんと相談しましよう」

「ウチは承諾してへんで」

「義手と同じように変に細工を入れるのもありますね！」

「人の話を聞けや、というかお前やつたんかアレ」

「もしものときの護身用ですよ！」

「護身用にしちゃえげつないんやけどな」

「そもそも使う場面が想像でけへんわ。

「あ、ちよお待つてんか……」

「アカン、走り去つてもうた。

明石なら今日中に屋台完成しましたっていいかねない。そのときはそのときなのだ
が。



「案の定や……」

「龍驤さんお疲れ様です」

午後の業務が終わつた空母の襲撃により鉄板屋が撃沈。燃料弾薬全てはき切つた。
もしこの車に応急修理女神がいたら資材が補充されて再稼動を強いられる。いやや、ウ
チは赤疲労なんや。

近くのベンチで口から半透明な白いナニカを浮かばせてていると、しばらく前に
走り去つた明石から声をかけられた。アカン、嫌な予感がする。

「屋台完成したので持つてきますね」

「まだ2000文字もいつてないで……いくらなんでも早すぎやろ……」

「100文字あればできますよ」

「それはいくらなんでも早すぎや……あ、このセリフ2回目や……」

「ついでに間宮さん呼んできますか？」

「いらん。ウチはもう引退した身やからな。それにウチの趣味でウチがこうなつてるだけや。気にするだけ無駄やで」

「そうですか」

「それはそうと、明石が屋台を完成させたのなら見なければならぬ気がする。
「明石い、屋台持つてくるんやろお？」

「なんでねつとりしてるんですか」

「疲れたんやあ」

「じやあ持つてきますね」



「ええやん。思つた以上に普通やつたわ」

「どんなのを想像してたんですか」

「変形して巨大な艦装になる屋台」

「それは……さすがにしてませんよ」

「なんや今のは沈黙」

「じやあ今から説明を始めますね」

「説明つて言うだけでもう普通の屋台やないな」

「もちろんです。私たちですから」

「まずは屋台において問題である移動ですね」

「時間がかかるからな」

「そこで強化型艦本式缶を改造して組み込んでみました」

「普通にエンジン積めばええやろ。なんでボイラーナンや。なんでそないなもん使ったんや」

「龍驤さんの燃料で動かすようにしたんですよ」

「そか」

「調理するための火もこの原理を応用しているものです。なので、稼動には燃料が必要になります」

「営業が必然的にここになるで?」

「その前提で作りましたから。龍驤さん基本的にここで営業するじやないですか」

「せやな」

「あとはデメリットとしてガトリングが使えなくなるくらいですかね。咄嗟の事態に対処できません」

「今まで使つてないんやけど」

「なので自衛システムを屋台に組み込んでみました」

「無駄や、外せ」

「即答！」

「当然や、危険になるものを放つて置く訳にはいかんやろ」

「そ、そうですね」

「深海棲艦が客として来るかもしけんやろ」

「どういう状況になつたらそなうなるんですか……」

「外見は昔の感じを出しました」

「現代風よりは好みやで。そんな変わらんけどな」

「店を持つとしたらどんな内装にします？」

「レトロでこじんまりした感じのが欲しいなあ」

「最後にこの装備は艦装です」

「屋台やないとは思つてたけどな。義手みたいに変形機構とか組んでへん？」

「まさか」

「じゃこのボタンはなんや？」

「変形して水に浮くようになります」

「何用なんや？」

「海上で営業するための機構です」

「海上で営業しろって遠まわしに言つてるわけやないんやな？」

「まさか」

「なんでとりつけたん」

「困つたときに屋台呼べるなつて思つて」

「どこでも現れる屋台なんて聞いたことないで」

「龍驤さんがなればいいじやないですか」

「アホか」

「あとは空を飛ぶ機構を開発して組み込めば万能屋台になりますね！」

「お前はどこを目指してるんや」

「以上ですね。後はどうにかして空で営業できるようにしなければ」

「誰が来るんや」

「……それを考えてませんでした」

「無理やろ」

「滑走路も取り付けねば！」

「まだ空飛ぶ航空戦艦の方が現実味あるで……」

「それはそうとして、海上の屋台つてかつてよくないですか？」

「見つからんわ」

「大海原にぽつんと存在する屋台……なんか神秘性を感じますよね」「ウチはやりたくないわ」

「意外と深海棲艦がよってくるかもしませんねえ」

龍驤

義手 対空+1

屋台 装甲+2

今日、鉄板屋は新しい商売道具を手に入れた。

05

「なんでや……」

潮の香りが漂い、海の波音以外何も聞こえない場所。都会の喧騒もない素敵で静かな場所。

簡単に言うと、海の上。

「なんでウチが海の上で営業せなアカンねやああああ!!」

「ウツセーリユツチ、サカナガ逃ゲル」

鉄板屋『龍驤』。本日は海上で営業しています。



発端は6時間前。レ級によるものだった。

「リユツチー、タライクベタラ」

「何言つてるか分からん」

「鱈ダヨ鱈、鱈釣リ行クカラツイテキテ」

「なんでウチなんや」

「ダツテ水陸両用屋台アルヤンカ」

「何で知つてるんや」

「ワレアオバ」

鎮守府の近くに来ている焼き鳥屋台『せやかて』の店主が実は深海棲艦、しかもレ級

であることを知つてるのはウチと青葉くらい。電や空母はまだ気づいてないようや。

そもそも青葉は、ウチから聞いた話を元に自分で調べてたどり着いただけで、ウチからもらすようなことはしない。した日には鎮守府が大混乱や。スリルあつてたまんねえとレ級は言うが、艦娘から見たら大迷惑や。

「ネーネーイーデショード・ジジイイネエカラ暇ナンドヨー」

「何があつたんや」

「ギツクリ」

「ああ、そらしやーないわ」

「ここで仕方ない、ついていつてやるかと思つてしまつたのが始まりかもしねない。後先考えず行動するもんやないな。」



「で、ウチはここで営業してなんの旨みがあるんや」

「アタイノ仲間ガ来ル」

「旨みやないわ！」

「ソンナ！ ワシトリユツチノナカダロウ!?」

「仲関係ないわ！」

「マーマーイイ奴等ダカラ大丈夫ダツテ」

屋台の隣に隣接している漁船でレ級が鰐釣りをしている。

今 の 時 期 は 脂 が 乗 つ た の が 釣 れ る ら し く 、 稼 ギ 時 は い ま だ と か 。 ウ チ も 好 き や で この 時 期 。 ま あ 、 夏 以 外 や つ た ら 何 で も 好 き な ん や け ど 。

「釣れる？」

「マアマア」

「そか」

客 が 来 る ま で 待 つ 以 外 や る こ と な い ん や け ど 。 ウ チ な に し た らええん や ? そ もそ も 海 上 で 冲 に 出 て る つちゅう の に こ の 屋 台 全 然 摆 れ ん な 。 ど う な つ て る ん や ろ 。

「あれー、龍驤さん！」

どこからかウチを呼ぶ声がする。が、海上には屋台と漁船だけ。他には何もいない。
そもそも声がくぐもつていてる。と言うことは海の中か。

「お、その声は」

さばあと海の中から顔を出したのはスク水の上にセーラーを来た少女。桃色の髪の毛を持つ鎮守府最強の潜水艦の艦娘。

「海の中からこんなにちはー！ ゴーヤだよ！」

潜水艦伊58。またの名をソロオリヨール略して「ソリヨクルの達人」。

「ゴーヤじゃないの!?」

「いや、ゴーヤよりもオリヨールのイメージはな」

「ひどいでち！」



伊58。

オリヨールのやり過ぎで鎮守府よりもオリヨールにいる時間が長くなつてしまつた潜水艦。まだ鎮守府が小さかつた頃から資材を支えてきた影の功労者。あまりにも周りともレベルの差が大きいため、今も一人で延々とオリヨールに生き続

ける（誤字にあらず）。ウチが引退する1年前、バシー、オリヨールに任意で出撃できる権利を貰つた。それ以降、提督がもういい、休めッといつても休み（オリヨールへ旅行）といった感じに出撃し続ける。

ブラックとかではなく、本人はとても楽しい様子である。自慢できることは「この鎮守府はゴーヤが育てたでち」と誰にでも言えること。

屋台にはゴーヤ、釣りをやめたレ級が席についている。

「珍しいね、龍驤さんが海上で営業するなんて」

「ウチも考えてなかつたからね」

「アタシガヒツパツテキタ」

「そうなのでちか。えつと」

「レツチヤント呼ビナ」

「了解でち。れっちゃんはなんでここに？」

「鮓」

「鮓つて何でち」

「今時期ノ白身魚。捌キタテヲフライニスルト幸セニナレル。トイウコトデリユツチ」

「油は持つてへんで」

「残念ダツタナ、材料ト道具ハ全部アル。觀念シナ」

「どうやつて捌くんや」

「捌クノハ俺ノ包丁スタンダードダ！」

「スタンドやないやろ」

「モチノロンヨ」

「もしかしてこのために呼んだんか？」

「セヤナー」

「ゴーヤも食べてみたいでち！」

「捌イテクルカラ待ツトレ」

レ級から油なべと油を受け取り、屋台の鉄板と交換する。

変形機構取り付けてあるらしいから揚げやすいように配置を変更してみる。なんか
ウチが想像するだけでガシヨンガシヨンいうとか。

まあ気づいたのは海上に浮かばせるときやつたんだけど。屋台がウチの想像通りに
変形した時点でな。

「すごいでち」

気づいたときには既に変形を終え、揚げ物を作りやすい環境に変化していた。

「あとはレキゅ……れっちゃんを待つだけやな」

「そうだね！ 楽しみでち！」



「……鉄板屋やないわ」

「イマサラ？」

揚げたフライをつまみつつぼやく。

今日の鉄板屋は鉄板料理ではなく、

「次からはやらんからな」

「ナンデー？」

「鉄板屋やから鉄板料理のみや」

「お堅いことはいいから飲むでち」

「リュッヂヨツキデー」

「ちよつち待つてなー」

揚げ物を提供していた。

特に理由なくP Cが重い

メモ帳すら満足に動かないのは何故なんや

時間軸は特に考えないほうがいいかもしません。だつてプロットないもん。

「リュッチハイボール」

「お前いつまで居座る気や」

「ごーやも頼むでち」

「お前オリヨクルはええんか」

「今日のノルマは既に終わってるよ」

ああ、陸上つて素晴らしい。いや、海か陸か言うたら海の方が好きやけどな、営業するとなると話はちやうねん。

誰や水陸両用に改造したアホは。余談だが、そのアホは現在空で営業するための機構

を開発しているらしい。空なんて誰が来るんや。海以上に来んわ。

アレ以降、誰も来なかつたから海上から戻つて陸上屋台版鉄板屋を再開した。明石い、なんで海上での営業を視野にいれちまつたんや……。

「レツチャンつてうまく隠せてるけど深海棲艦でちね」

「ナゼ バレタシ」

「会話がカタカナだから？」

「シカタネーヨ、コレハ演出上必要ナンダカラ」

「お前等そういう話は禁止や」

――――――

「まずレツチャンは深海棲艦特有の匂いが限りなく薄いでち」

「マーワタシダカラナ」

「だから声で判断したんでち」

「声？」

「深海棲艦の声は普通の声にフィルターが掛かつてゐるような感じなの。レツチャンにも当てはまるよ」

「ソーナノカ?」

「その要素すらも限りなく薄いから、艦娘ですら」ゴーヤみたいに深海棲艦と何回もつるんでないとわかんないと思うでち」

「あの話マジやつたんか」

「あの話?」

「ああ、潜水艦が深海棲艦と飲んでるつちゅうやつ」

「それいつたら今の状態も当てはまるでち」

「レツチヤンは深海棲艦と言うには邪悪さが足りん」

「ゴーヤの飲み友もそうでち」

「それじや戦闘はどないするん?」

「形式的に終わらせてその後飲みながらお互い愚痴りあう感じでち。最近は聞き手ばつかりだけど」

「それでええんか」

「ごーやは欲しいのは燃料と弾薬だけ。戦果なんてイムヤにでも押し付けるでち」「オイ、リュツチ、コイツドツカノネジガ外レテル」

「言われなくともわかってるでち」

「本人がそれを言うんか……」

陸上で営業再開から1時間。誰もこない。ずいぶんと珍しいこともあるもんやな。

「それは当然でち、今何時だと思つてるの？」

ゴーヤに言われ時間を確認。

出発したのが朝、鱈を捌いたのが午後、そして今現在夕方。

近くに置いた正規空母お断りの旗がもしかして客を寄せてないんだろうか……

「基本この屋台に来るのは夜でち。夕方だつたら『せやかて』に行くでち。あと、今日はタイミング悪かつたりする」

「なんでや？」

「だつて今日は大規模作戦……」

そこまで言つたゴーヤは、何かに気づきハツとした顔になると。

「ああ、そつか、龍驤さんもう引退してるんだつた」

「…………まあ分かつたわ」

大規模作戦だから来ないというわけだろう。こんなことになるんだつたら車持つて

きたほうが良かつた。

あつちなら屋台よりは気軽に来れるはずだ。

「じゃあ店じまいにしたほうがええかな」

「オット、客ノ前デソウイウ事言ツチャウ?」

「……わかつたわ、貸切な」

しかたない、今日はこの二人に付き合うとするか。

「あれ？ 大規模作戦？ なんかあつたん？」

「南で深海棲艦が大量発生したみたい。それを叩くんだって」

「モウスグコミケダカラナ」

「は？」 「え？」

「割ト行ク奴多クテナ、今回ハソノ規模ガ大キスギタダケダ」

「……人類側は存亡を懸けてるつちゆうのにあんた等と来たらなんやねん」

「まさかここまでとは思わなかつたでち……」

???

「時ハ来タ！」

「オオーツ！」

「今コソ日本ニ上陸スル時！」

「オオーツ！」

「全テハ薄イ本ノタメ！」

「オオーツ！」

「シカシ目ノ前ニハ憎ムベキ艦娘ガ道ヲ塞イデイル！」

「オオオ……」

「ダガオマエラノ本ニ懸ケル思イハ、ソノ程度デ折レルモノデハナイ！」

「オオオツ!!!」

「希望ノ明日ヲ掴ミ取ルタメニ！ 輝カシイ未来ヲ掴ムタメニ！」

「オオオヲヲヲツ！」

「全軍！ トツゲキイ!!」

「ア、委託ハ今ノウチニヤツトイテ。タブン今年モムリダロウカラ」

「オイオイオイ コノ上ゲテ下ゲラレタ士氣ドウシテクレルンダ」

「シナナイ程度ニヤレツテコトヨ」

「アー、ハイハイ、ジヤアミンナー、テキトニー流シニイクヨー」

工廠。

ウチは屋台のメンテナンスにやつてきていた。いや、この前海で営業したやん。海風の影響を考えて、や。

決して改造に来たわけやない。だから視界に映っている工具を大量に抱えた明石なんて気のせいや。

「出前……出前かあ」

「どうしたんですか龍驤さん」

「いや、ちよつち遠方のお客さんに頼まれてな。ぜひともウチでやつてくれ、やそうや」

「そうですか、あ、ちよつと龍驤さん」

「どないしたん?」

「飛行機構完成しました」

「は?」

「せつかくなんで取り付けてみました」

「は？」

「ついでなのでボタンのカラーリングも変えておきました。陸上は緑、空中は水色、海上は藍色です」

「ちよいまで」

「これで出前いきますね？」

「ウチは解決しろつて言うとらんわこのアホ」

「アホで結構。私がアホだからこそこれが生まれたんですよ」

「……まあええわ。説明頼むわ」

「今回の機構は完全に移動用です。空中で営業することは現状では考えていません」

「おい、今現状言うたな？ 言うたよな？」

「通常の屋台に変形機構を施して空を飛べるようにしました」

「その技術他に回したらええんとちやう？」

「というのは全部ウソで……」

「ウソかい！ どこからウソなんや！」

「全部ですよ。特に変な改造は施していません」

「そか、それならええわ

ウソにしてはずいぶんと事細かな説明やつたけど……」

「私言いましたよね？ 改造は施してないって」

「まさか……」

「新しく作りました」

「真性のアホかお前はツ!!」

「完全に出張用の屋台ですね」

「出張用の屋台とか聞いたことないわつ！」

「もちろん海上では営業できません。変形できるだけの屋台なので」

「それは『だけ』とは言わんわっ！」

「ついでに『せやかて』の分も作つておきました」

「なぜや」

「予算が余ったので」

「別に回せや！ そもそもよく予算下りたな！」

「提督が喜んで出しました」

「なに考えとるんやアイツは！」

「なんでつて、そりや龍驤さんですし、ねえ……」

「ええわ、それ以上言うな」

「そこで雰囲気を塗り替えるために別の屋台もご用意しました」

「ここ」でその話をぶち込むんかアンタは！」

「海中で営業するための屋台なんですが、今この場にはありません」

「なんでや！」

「ただの潜水艦ですからね」

「それはもう屋台とは呼ばんわ!!」

鉄板屋龍驤。

車一台で始まつた小さな店は。

いまや屋台2台と潜水艦1隻で営業するほどに成長していた。

これは成長つていうんやろうか。

明石の全開の趣味を押し付けられたつていうんやないんやろか？



翌日。

早朝に出前依頼先から連絡が来た。
多忙になつちやつたゼメンゴメンゴという内容だ。どうしてくれんねんこの屋台。
もうええわ、初心に帰る。今日は車で営業や。久々や。ということで魚市場へとやつ

てきたんや。

「オーリュツチー」

魚市場にいけば必ず遭遇するわけで。

「おーレ級」

「レ級ツテ言イヅライカラ、レツチーデイイゼー」

「……嫌や」

「他ニハ、レツチヤン、レー、レレレ、レー嬢……」

「割と多いな！」

声に出して指を使つて数えるレ級。レレレとかレ級より言い辛いやんか……

指の動きが10を越えたところで考えるのをやめた。いくらなんでも多すぎや。

「ナンタツテ、ココノ非公認アイドルダシ？」

「非公認とかの前にアイドルやつたんか」

「自称ヨ自称」

「非公認な上 自称なんか……」

「デモー？」 条件ハ揃ツテルヨー？」

あたりを見回すと屈強な海男たち。女性は少ない。客引き効果は薄いが、ここに来る連中は人以上に質を見る人が多い。問題ないんやろな。

「リュッヂモイケルンデネ? 非公認常連アイドル」

「もうようわからんわ……」

「ア、リュッヂ、今日行クワ」

「なんでや」

「ナンデモ明石ガアタイノ新シイ屋台作ツタンダツテ」

「連絡先交換してたんかい!!」

「マアバアチヤンノ屋台手放スワケニハイカナイカラ、受ケ取りハシナイダロウケド」

「そか」



鎮守府。

昼のピークと空母ラッシュを乗り越え、一息つける時間。明石とレ級が話し込んでいるみたいだ。

「ソシテナニヨリ、屋台ノ年季ガ足リナイ。バアチヤンガ言ツテタ。年季ニ勝ル物ハナ
イ、ト」

「年季ですか」



「長ク使ツタモノニハ神ガ宿ルツテ言ウジヤン」

「そうですね」

「ソノ理論ダト、コノ屋台ニハ神ガ宿ツテルンダ」

「そなんですか!?」

「150年ハ経ツテルラシイ。ソレナノニ老イヲ感ジサセナイコノボデイ……」

「……なるほど、神を宿らせればいいんですね」

「おいレツチヤン、明石になに吹き込んだんや」

「サ、サア……」

「といつても神なんてよくわかりませんし。いつそ妖精さんを宿らせちゃいましょう」

「おいレツチヤン！ なにしてくれたんや！」

「エエ!?

「キツカケを与えると明石が変な方向に走るで！」

「この際レツチヤンの屋台は諦めましょう」

「そしてそのとばつちりがウチに飛んでくるんや！」

「ではお二方！ 私は工廠の方に戻ります!!」

「……もうこここの工廠潰すしかあらへんわ」

「アタイ深海ダケドサ、ソレハヤメトケツテ忠告スル」

「深海棲艦つてなんやろな」

「人類ノ敵ダロ?」

「それをアンタが言うんか……」

本日は夜の営業や。場所は鎮守府付近。居酒屋も兼ねた屋台や。この前天啓が来たからな、揚げたこ焼きに挑戦中や。

客はレ級とゴーヤ、あと青葉。皆、ちよつと今日は貸切なんや、すまんな。

「で、龍驤さん、どうしたんですか貸切にして」

まず口を開いたのは青葉。ヤツの情報網は鎮守府を超えて世界を掌握しているとか。なんとか。

少なくともウチの情報と深海棲艦の情報を持つての抜け目ないヤツや。

「まずはこの集まりを見てみい、なんか気づかへんか？」

「この中に深海棲艦がいるでち」

「……ああ、それをなんとも思わんようになつてもうた人の集まりや」

集めたのはウチなんやけどな。

オリヨールの深海棲艦と飲み会をしているゴーヤ、そしてその情報を知っている青葉。深海棲艦に対する警戒心はあれど、深・即・斬する奴等やないと思って呼んだんや。

「レ級、ウチ聞きたいことがあるねん」

「ドシタ」

「あんたらは何のために艦娘、いや、人類と戦つてるんや?」

「ソレヲ説明スルニハ、深海棲艦ノ内部事情ヲ語ラナキヤイケナイ。メンドクサイ」

頬杖をついて心底つまらなさそうにため息を吐くレ級。

「そか、ならええわ」

「マズ、穩健派ト過激派、中立派ガアツテ……」

「結局話すんかい!」

「それに共生派もいますねえ。レ級さんはそれでしょう」

「あんたはどこまで知ってるねんアオバア!」

「ゴーヤと飲み会してるチーチャんとかは?」

「どつちか」というと穩健派ですねえ」

「いや、まずはどれがどうだか説明してくれへん? 大体はわかるんやけど、確信を得たいねん」

ウチの言葉に仕方ないですねえとため息を吐く二人。レ級と青葉いや、ため息つきたいんはこつ

ちやアホ。

焼いたたこ焼きを手早く揚げていく。初めてやからタイミングがわからへん。

「マズハヨク知ツテルダロウ過激派ダナ。問答無用デ敵意ヲ向ケテクルヤツガソウダ」
 「それが普通なんやけどな」

現役のときによつちゅう相手にしていた奴等の事やな。よく言われる深海棲艦や。
 「アア、深海棲艦ノ大半ガコレダ。鎮守府ニ攻撃ヲ仕掛けルノハコイツラダケダガ。ア、
 敵意ヲ持ツテルノハ過激派ダケジヤナイ。中立派モアル」

「どういうことや?」

「誰でも家を荒らされたら起こりますよね?」

「……ああ、分かつたわ」

「繩張り意識つってやつでちか」

「そのとおりです。中立派は自ら攻撃は仕掛けませんが、近づくと攻撃してきます」

いつか発生した鬼やら姫やつたか。まあ、その中に攻めてくるやつもいたんやけど。

「なんでそこまで知つてるんや」

「ダツテアタイガ情報流シテルシ?」

「ただのスパイでち」

「別ニバレテモ問題ネーシ。考工ナシノ能無シナ過激派トカ、迎エ撃ツダケノ中立派ナ
 ンテ滅ベバイイ」

「そいいえばいつだかの南方遠征はどうなつたでち?」

「轟沈ゼロで済みましたよ」

「チナミニアイツラハ 穏健派ナ」

「穏健派!? なんで攻めてきたん!?」

「穏健派ハ 基本的ニ何モシナイ。艦娘ガ来テモ逃ゲルダケ。氣ノセイダツタ時ツテアルダロ? ソレダヨソレ」

「ああ、なんか分かるでち」

「マ、コミケノ時ダケ過激派ニナルケドナ。普段ハ中立派ト違ツテ話通ジルカラナ、嫌イヤナイ」

話しながら揚げていたたこ焼きを手早く皿に盛つていく。ああ、油の処理だるいわ。

一通り聞き終えたことやし今から飲むかと思い、ビールを用意しようとしたところで思
い出す。

「そういえば共生派つてなんや?」

「簡単ニイウトアタイノ事ダナ。ナンカモウ飽キタカラ、イツソ人類ニ絡ムワツテヤツ」

「それでええんか深海棲艦」

「個人ノ自由ツテヤツヨ」

「……もうウチは考えるのやめるわ。ほれ、揚げたこ焼きや、感想も頼んで」

「待つてましたー!!」

「ちよつとすいません龍驤さんメモまだ書き終わってません出さないでください」

「そんなんほつといて食えや」

「後デ教エルカラ、ナ?」

「お前も少しは躊躇せえや」



ウチも混ざった飲み会が終わり、それぞれがそれぞれの帰路へつく。青葉は艦娘寮へ、ゴーヤはオリヨクルへ。

オリヨールが家でちと胸を張つて言い切るゴーヤは社蓄の鑑やと思う。提督はやめさせようと必死になつてたけどな。

レ級とは途中まで同じ道や。ウチが屋台を引っ張り、その屋根の上にレ級が座る。明石が勝手につけた謎技術運転アシストなかつたら今頃倒れてるわボケ。おおきにそして勝手につけんなアホ。

「レ級、交代せや」

「イヤヨ」

「鼻歌までしだすレ級。私は楽しいですオーラを存分に出している。とことん引っ張

る気ないなこりや。仕方ない、無理やり降ろすか。

「そういえばなレ級」

「ドシタンヤリユツチ」

「明石が作った屋台に何が搭載されてるんか分かるか?」

「イロイロダロイロイロ」

「そん中に変形機構つちゅうやつがあるらしいで」

「ナニソレミタイ」

レ級が屋根から飛び降り、屋台のあたりをぐるぐる回りだす。

「そこの青いボタンみたいやで」

「ポチットナ」

「いや流石に躊躇せえよウチ危ないやろ」

嫌な予感を覚えたウチは屋台から手を離して少し離れる。レ級はいまだボタンを押した格好のまま。

「レ級あんたも離れーや!」

「コトワル」

その言葉を皮切りに、屋台がレ級を弾いて変形を始める。ちょっと展開に難ありや。

屋台から突如として展開される大量の木の板。それが複雑に組み合わさり、時には宙

を飛ぶ。

なあ、これどうやつて動いてるんや？ 説明しようがないんやけど。でも言葉にするには簡単やな。目の前には屋台だつたゼロ戦が出現した。説明放棄や。

「ナンダコレ」

「それ言いたいんはこつちもや」

屋台ゼロ戦のサイズはとても小さい。屋台が少し横に広がつたサイズやな。……飛べるんやろか、これ。

とりあえず今は夜だ。試すなら後だろう。操縦席の中にある茶色のボタンを押す。消去法的に屋台に戻るんはこれやな。

先ほどのレ級の例もある。すぐさまゼロ戦から離れると、屋台への変形を始めた。

「素晴ラシイナ」

「そか？」

「コノ解明デキナイ動キガナントモ」

「深海棲艦の目を持つてしてもわからへんのか」

恐るべし明石。アンタの技術力はどこまで成長するんや？

「ソウダ、リュッチ、明日ハ深海デ営業シテクレナイカ？」

「なんでや」

「潜水艦アルダロ？ アノ海中用屋台ツテヤツ」

「潜水艦でええと思うわ」

まあ別に予定があるわけではない。行くのは問題ない。

でも明日工廠に行かなければいけないのは嫌やなあ。明石が次にウチのこの義手にも屋台を仕込みそうや。

ウチが警戒すべきヤツが4人いる。

まずひとりは明石。なんでかつて？ もう言うまでもないわ。

もうひとりは青葉。出会うたびに最低一つネタを生み出す。ウチは引退した身じや
ボケ。

もうひとりはレ級。そもそもナリが深海棲艦や。最近は深海でもええやんとは思
い始めてるが。

そしてもうひとりは――

「りゅーじょー！ ツケね！」

「あつ！ までや！ 島風！」

ツケと食い逃げの達人、島風である。

最初はよしみだし見逃していた。甘やかした結果、島風はそれ以降もツケを繰り返し
た。そして何回目か覚えてないが被害額^{ツケ}が1万を越えた時点でウチの仮の顔も般若の
面相へと変貌。

感情をおさえることなく島風を追いかけはじめた。店は近くにいた電に任せておい

た。あの時はホンマすまんかった。しかし、結果はおいつけんかつた。壁蹴つて鎮守府の屋上まで逃げられるともうどうしようもない。

艦載機さえあればどうにかなるんやけどな……。

「呼びました?」

「呼んでないわアホ、自分の住処こうしょに帰れ」

どこからともなく現れた明石をシツシツと追い払いつつ、島風にとられた作り置きのたこ焼きを頭の隅からはじき出し、目の前のお客の為に薄い生地を焼く。

目の前にいるのは電だ。クレープをご所望らしい。出来るつて聞いた瞬間、目を輝かせてたわ。それにしても久々やな、電。

屋台はさらに改造され、ボタンひとつで鉄板がそれぞれの鉄板料理に適した形に変形する機構が取り付けられた。ああ、今回は実用的や……。

ちなみにその改造した本人である明石はトボトボと帰つていった。いや、なんで帰れ言われただけで悲しそうな背中をかもし出してんねん。勝手に来たんはアンタやろ。「島風さんをおいかけないのですか?」

「追いかけるだけ無駄や。屋上に逃げられておしまいや」

「ああ、そうなのですか」

「ウチにも艦載機があればなあ……」

「呼びました？」

「目に見えない速度で戻つてくんやクレープの邪魔や」

「あ、確かにそれはまずいですね、帰ります」

電さんの邪魔はしちゃいけないお決まりですからね、と再びトボトボと歩き出す明石。瞬間移動ではよ帰れ。

とりあえずクレープの生地が片面焼けたのでひつくり返す。

その間にクレープの中身を……あ、そうや、中身どうするか聞いてへんかつた。

「電、クレープの中身はどうするんや」

「龍驤さんのオススメでお願いするのです」

「おっしゃ、たこ焼きいれるで」

「おーそどつくすに頼むのです」

たこ焼きクレープとか新境地見えるで。試したことないし試したくないんやけどな。

屋台の下を覗き、そこに置いてあるホイップやら砂糖やら取り出す。

なんとこの屋台には、屋台の形態にあわせて材料も変化する謎技術機能が搭載されていた。お好み焼きやたこ焼きだつたらソースとかマヨネーズとか。クレープだつたら今みたいにホイップやらジャムやらだ。

おそらく飛行機改造されたときに搭載されたんやろうけど、ホンマ実用的や。こうい

う機能が欲しかつたんや。陸上海上営業機構なんてオマケや。オマケにしてくれ明石。ホイップと砂糖を泡立て機で混ぜる。あ、これオートにでけへんやろか。ちよつと明石に相談してみよう。余計なことしないなら歓迎や。ウチは手のひら返すで。

「チヨコとイチゴとたこ焼き、どれがええ?」

「イチゴでおねがいするのです。あとサラツとたこ焼きを混ぜないでほしいのです」



クレープとは別でたこ焼きを渡した後、電はスキップしながら帰つていつた。いやまあ儲け優先でやつてるわけやないしな。決してクリームを口につけたままの笑顔に敗北したわけやないで。

それはそうと、別件の話も終わらせよか。

「明石」

「お呼びでしょうか」

名前を口にすれば目の前に明石。どうやつてきてるんやろか。瞬間移動だととしても風を感じられなかつた。

「一回来たと言つことは用事があるつてことやろ。言うてみい」

「そうですねえ……」

もつたいぶるかのよう何かを背中に隠す明石。これは小型やな。小型なら問題あらへんはずや。

次に明石が口にした言葉は考えることも忘れるほど衝撃的なものだつた。

「龍驤さん。龍驤さん専用の艦載機を飛ばせる義手が完成しました。試作ですが」
そういうて、背中に隠していた黒光りする義手をとりだしてきた。

「なぜ黒光りなんや」

「特に理由はありませんよ」



「艦載機を発艦させるとときは義手の機構が変形してガトリング状になります。反動は気にしなくて問題ありません」

「まさかこの義手に変形機構を入れたんはこのためか?」

「いえ、夕張さんの意見を勝手に反映したまでです」

「結局お遊びかい」

「それが今回の義手の製作に繋がつちゃったわけなんですけどね」

目の前には、艦娘として、龍驤として再び戦場に戻ることができる義手が置かれている。

今まで考えても見なかつた。再び艦娘として働くことができるなんて。夢物語だと思つていた。

「しかし、問題があります。この義手をつけると今まで以上にパワーが吸い取られすぎて水上に浮くことが出来ません」

「本末転倒やないか」

「いいじやないですか、陸上用艦娘として活躍できますよ」

「陸上なのに艦娘とは一體どういうことなんや」

「いっそ戦車に転向します?」

「お断りや」

戦場へ舞い戻りキンセルや。自衛用軽空母龍驤爆誕や。どことなく自宅警備員に近い響きな氣がするで。

「で、なんでこの話を持ちかけてきたんや?」

「提督が出向——いや、出世ですかね。こここの艦娘も一緒に大きい鎮守府に移ることになつたんです。まあ一部を除き、ですけど。」

「一部?」

「筆頭は私ですね」

「さつさと移れや。資材に気を使うことなくやれるんやで
「自由に動けないのでバスです」

「くたばれ」

「嫌です」

「他には?」

「伊58さんとか……青葉さんですね。主力の方々はあちらへ行くみたいです
「なんで青葉なんねん」

「どうにも動きたくないみたいですね。まだ賽の……いや、これは機密事項でした
「……ゴーヤは聞くまでもあらへんな」

「束縛されるのをとことん嫌いますからね」

「ということはこの鎮守府どうなるんや?」

「新しい提督が着任するそうです」

「そうか、あいつらいなくなるんか」

「最後に顔を出したらどうです?」

「いや、やめとくわ。言うこともあらへん」

「そうですか」

いやまあ仲のいい奴にはあいさつしたいんやけどな。ウチが特別扱いされてることに憤りを感じる連中がおるから余りいきたくないねん。

「本題に戻りますけど、人材を腐らせておくわけにはいかないんですよ」

「それには同意やな」

「だから艦娘として戦場に立つことが出来なくとも、何らかの形で手伝つて欲しいわけなんですよね」

となると新人にアドバイスつていうことやな。それくらいならかまへんわ。

「早い話、近くに店を開いてください龍驤さん。お金は預かっています」

「へ？」

「新任ということはしばらく空母がいないわけでして。その上、龍驤さんは発艦方法が従来と異なる形になつちやいますし」

「いや、操作は同じやろ？」

「そうですね」

「ならなぜ店開く話になるんや」

「アドバイザーという点ももちろん期待していますが、それ以上に食事の方を受け持つてもらいたいのですよ。間宮さんと伊良湖さんもいきますから、必然的に食事が……」

ねえ

「なんでそんな言いよどむんや」

「しょっぱな戦艦レシピ回して比叡さん来たらどうします?」

「諦めい」

「嫌です」

まあ仕方ない。どうせ商売先はここだ。魚市場もそう遠くないしねえやろ。

「……まあ金あるならええか」

「ありがとうございます!」

こつちの面子がいくまで時間はあるし、どうせ店来るだろうしあいさつはそのときでええか。

「もしかして島風も行くんか?」

「そうですね」

アカン、アイサツしないと。

10

鎮守府の皆が異動して2日経つた。

残つたのは青葉と明石、それに伊58。一応ウチも、つて感じやろか？ 正式な所属にはなつてへんみたいやけども。

当時の様子は……そうやな、出発前に電ちゃんとか加賀とかその辺の常連が挨拶ついでにいろいろ買ってつたで。ついでにタネのレシピも渡しておいた。放置しどつたら赤城あたりが確実にしてかしそうやからな。

最後に提督が来た。島風のツケ分を払いに来たらしいわ。ぱつと見ても諭吉さんが何人かおるんやけど。ウチはここまで食われてたんか。

「義手は大丈夫かね？」

「全然問題あらへんよ」

「本当にすまない」

「ええよええよ、不慮の事故やつたんやから」

「しかし引退せざるを得ない状況を作つたのは私だ」

「それはあつちの勝手や。キミならまだしも、ウチが考える必要ないわ」

ウチと明石と提督だけの秘密……まあ青葉も掴んでそうやけど。本当の引退理由はウチの特別扱いにある。義手の存在だ。

本来、四肢を欠損した艦娘は解体処分される。そもそも欠損自体が稀なケースではあるが、前例自体は今までにある。本来はウチもその道を通り、この場にいないはずなんやけど、それを勝手につなぎ止めたのは提督。感謝しとるで。

でも、それを良く思わない連中もいるわけや。解体処分が常識やからな。一時期、提督がトチ狂つたんじやないかって話もあつた。

そんなこんなで元凶と化したウチは鎮守府にいるわけにはいかんくてな。これが真実。他の理由は嘘ではないが、建前つてやつやな。明石はこれを知った上でどうにか復帰させようとしてたみたいやけどな。

「それはそうと明石がウチの店作るみたいやで。暇が出来たら顔出しぃや。歓迎したる」「タダとは言わんのだな」

「10割引くらいはしたるで」

「それではタダと一緒にないか」

「まあ頑張つてや」

「言われなくとも」



そして現在。

2日で建つてしまつた鉄板屋「龍驤」本舗内にて。ウチ、青葉、伊58と、この鎮守府に残つた面子が集合していた。明石はなんか用事があるらしい。

「では現場に復帰してくれるんですね？」

「訓練の面倒を見るだけや。戦場には立たんで」

「龍驤さんどつちに住むんですか？」

「こつちに住むわ。そんな市場と距離離れてへんしな。そや、引っ越し手伝い頼むわ」

「たいしょー！ ビールひとつ頼むでち！」

「ちよつち待つてな」

「真つ昼間から飲むんですかゴーヤさん」

「夜にいけばいいでち」

「夜つて……」

「あとゴーヤのことは新しい提督にはしばらく黙つてて欲しいでち。好きなタイミングでオリヨクルにいけなくなつちゃう」

「夜な夜な勝手に増える資材」

「倉庫に入れずに明石に全部丸投げするよ」

「そこは資材倉庫にいれましようよ」

「そういえば新提督はいつ頃来るんや」
それを訊いた青葉がいきなり顔を青くさせた。何か重要な事を忘れていたのだろうか。

「あ、あの、皆さんに一つお伝えし忘れていたことがありますて」
「言つてみ」

「あ、はい、えつと、新提督ですが……」

「ちよつち落ち着け」

目に見えて焦りだした青葉を落ち着かせつつ、青葉の言葉を待つた。
ようやく青葉が焦りを押さえ、口を開くと同時――

「おじやましまーす」

「おじやましまーす」

「おじやましまーす」

「おじやましまーす」

鉄板屋『龍驤』の入口である引き戸をガラガラ鳴らしながら。
四人の黒髪の艦娘が入ってきた。

「私は軽巡洋艦の北上様だよー」

1人目は熊……球磨型軽巡洋艦の北上。

「私は重雷装巡洋艦の北上様だよー」

2人目は……北上がさらに魚雷を搭載し、重雷装巡洋艦と化した北上改。

「同じく重雷装巡洋艦の北上様だよー」

3人目は服の色が白くなつた重雷装巡洋艦北上改二。

そして4人目はどことなく最初の北上に似ていて――

「はじめまして、ボブです」

「誰やねん！」



数分後。

「ボブですよボブ、ボブ宇都……じやないボブ栎木です」

「対して変わらへんがな」

「土地が広くなっています」

「そういう問題やないんや」

ちなみにトリプル北上様は鎮守府へと先へ向かつたようだ。明石が来なかつたのはこれやつたんかな。

それはそうと、今度着任してきた——なぜか北上の格好で——提督が残つた。つまり客。ウチが相手しなきやいけない。声から判断するに女性だろう。それにしても声と口調は似ていないとほいえ、姿形は本当に似ている。艦装つけてない状態で並ばれると本当に分からぬ。

ゴーヤはいつの間にかいなくなつていた。たぶんオリヨールに逃げたんだろう。流石オリヨールの達人、出発するときはいつも唐突。

青葉もどこかへ消えていた。たぶん店内のどこかに隠れているんだろう。お前らいつの間に逃げたんや。

「それにしても着任早々『鉄板の龍』に会えるなんて思つても見ませんでした」「初めて聞いたわそれ」

「引き寄せられざるを得ないんですよ。作品的に考えて」

「それこの作品やないから、ウチら一切関係ないから」

『竜田の龍』こと天龍さんがおつしやつっていました』

「龍田やないんかい」

「龍驤ちやんはワシの獲物、と」

「ウチはアイツに何かした覚えないんやけど」

「庇つてくれた仲間であり、同じ龍を背負う物として打倒しなきやいけない敵であり、組織を継ぐためにも倒さなければならぬ伝説であると」

「なんやもうアイツ混ざりすぎてどうしようもない状態になつとるやないか」

「ああ、あと私の本名はボブじやないです」

「そんなことだろうとは思つとつたわ」

「いやあ、先方の所の緑髪の艦娘さんがおつしやつていてね」

「アイツか」

「こう切り出せばあの人は反応するはずだつて」

確かに反応せざるを得ない。

まんまと引っかかるつてしまつたウチは注文されたお好み焼きを焼き始めた。

「それにしても新任の提督が北上を3人も」

「ああ、北上さんのうち2人は他の鎮守府から借りてきました」

「はあ!?」

「正確には北上改と北上改二ですね」

「いや、ちょっとキミなにしてんねん」

「非番の所をわざわざ来ていただきました」

「なんでウチ驚かすためだけに引つ張つてくるんや」

「明石さんと夕張さんが提案したのを先方の提督が通したみたいです。あとはそのコネでちよちよっと」

「なにやつてくれとんねんあのドアホ!!」

「ああ、ここでの発言は他言無用ともおつしやつてました」

「ウチの発言まで想定済みなんか」

「本音は隠さないつて言つてましたからね」

「そんなことないで」

「本当に重要じやない、が頭につきますけどね」

「なんかもう相手のペースまんまや。そういう意味では最初つから負けてたんやけどな。」

「一応言つておきますけど私は龍驤さんドッキリ計画に関しては何も関与してませんからね」

「実行はしたけどな」

「ええ」

「開き直んなや」



あの後、新提督はお好み焼きを食べてから鎮守府へ向かつた。それと入れ替わるよう
に北上2人がやつてきて焼きそばを食べていった…………あれ、焼きそば注文されたの
今回初やないか？ 粉物しか頭になかったわ、反省やな。

そういうや新提督の名前聞きそびれた。もういいやボブ提督で。北上提督の方が……
いや、ややこしい。後で改めて名前を聞くとしよう。

そんなこんなで今日も鉄板屋は続く。

仕込みよし。タネよし。清掃よし。あー、ひとり誰か欲しいわ。大変なんやもん。

店内のチェックを全て終えたところでのれんを外にかける。左を見るとなにやら見慣れた黒フードが一人並んでいるようだ。知らん。

可能な限り視界に入れないように店内に戻り、鉄板を暖める。そして、店内の隅のテーブルで工具をウインウイン言わせている艦娘に声をかけた。

「明石、工廠に帰れハウス」

「嫌です」

「お前出禁や」

「結論が早すぎる!」

といいながらも作業の手を止めない明石。今、明石は提督から頼まれた12.7cm連装砲を改修している最中だ。いや、おうち工廠でやれや。営業妨害で訴えるで? そして勝つで?

「建てたのは私ですよ?」

「ウチが出てつてもかまへんで」

「それだけはやめてくださいお願ひします」

「じゃあそれ持つて出てけや。そもそもここで改修すんなアホが」
鉄板屋「龍驤」は基本的に艦娘の食事処である。だから艦娘である明石がいてもおかしくはない。おかしくはないのだがなんか腹が立つ。

明石が渋々片付けていると、誰かが引き戸をガラガラと開けて来た。誰だかわかるんやけどな。

「タイシヨー！ 中トロヒトツー！」

「ここは寿司屋やないわアホか」

「エー、デモ鉄板屋ツテ書イテアルカラ」

「何をどう間違えたんやお前は」

「どうどう黒フード級が視界おみせに入つてしまつたのであつた。



「大将、タコクレ」

「たこ焼きな、ちよい待ち」

「……イカクレ」

「イカ玉やな、たこ焼きの後でええか?」

「マグロ」

「ホームセンターのペツトコーナーに置いとるで、自分で買つてこい」「ネコジヤネーヨ!?!」

「フードの中身はネコミミやないの?」

「ンナワケナイダロ!!」

「マジかウチの夢返せ」

「知ラネーヨ!?!」

「……………マジか」

「冗談ジヤナカツタノカヨ!?!」

魔改造屋台の技術を応用して作られたこの鉄板は、切り替えボタンでそれに応じた形に変形する夢の機構だ。妖精さんの力ヤバいな。燃料が消費される
という部分はまだ改良できてへんようや。

明石から聞いた話だが、弾薬がなぜ消費されるのか聞いてみたところ、妖精さんは妖怪のせいだと言つていたらしい。余計わからんわドアホ。

ちなみに、明石は大人しく住処へ帰つた。工作艦といえど一応艦娘、鎮守府にいなければならない。ウチはノーカンや。

「で、キミには教えてへんはずなんやけど」

「風ノ噂ツテ奴サ」

今の時間は飯時ではないのでそこまで客が来ない。現状、レ級1人である。ちなみにこの店は一般の方々に開放もしている。あまり来ないけど。

「アー、ソウソウ、コノ辺ノ提督変ワツタ?」

「なんでウチに聞くねん」

「近海ノハグレガ『弱クネ?』ツテボヤイテタ」

「あいつらもぼやくんか……」

「容赦ナク吹ツ飛バサレテタケド最近緩ヤカニナツタツテサ」

「吹つ飛ばされるのは変わらんのか……」

「アレ、オ好ミ焼キデ混ゼルノツテヒロシマ風ダツケ?」

「関西風や、混ぜるか?」

「オナシャーツス」

お好み焼きプレートにもろもろの材料をぶち込んだタネをたらす。

ちなみに今の鉄板は半分たこ焼き用、半分お好み焼き用だ。変形には燃料が吸われる以上こうするのが燃費ええねん。

燃料の補給はどうしてるかつて? オリヨール^伊⁵中毒患者に頼んでるんや。

「ハイボール」

「あいよ」

「ソウイイヤオレツテ焼キ鳥屋台ヤツテタヨネ?」

「せやな」

「見事ニ忘レラレテルンダヨネ」

「せやな」

「正直ナ話、一人称モ忘レテルンダケド」

「レツちやんねーとか言えればえやん。レつたんでもええで?」

「レつたんエエナ」

「ええやろ」

「採用」

「おおきに」



夜。

「龍さーん、 適当になんかちよーだーい」

「龍さん、私にもヒトツ」

「レつたんモ欲シイナ」

「”何でもいい”が一番めんどくさいんやお前ら」

「じゃあクレープ」

「ならもんじやで」

「ヽキノコノバター炒メヲ添エテヽ」

「統一せえなめんどくさいわホンマ」

「えー」

「お客様はー」

「神ガ作リシモノナンダヨ?」

「随分深そうな話やな!?」

「とりあえず飲み物はハイボールで」

「あ、私もハイボール」

「ハイボール一択ヤデ」

「飲むのは統一するんやな!?」

「統一しろって言つたのはそつちじyan」

「統一したらこれですよ」

「コレダカラリュツチハヨー」
「ホンマめんどくさいなお前ら！」

平日は一般の方々は来ない。そもそも基本陸の方の居酒屋に行つてゐるし。宣伝しないから当然だし。ウチぜんぜん悲しくないし。

代わりに鎮守府の提督と北上が來てゐる。ついでにレもいる。いつせいにボケられると困んねん。

「もういい、飲み物はハイボールでツマミは昼の残りやお前ら。イヤなら出てけ」

「仕方ないねえ」

「この辺で」

「カンベンシテヤロウ」

「お前ら初対面なのに息ぴつたりやなコンチクショウ!!」

「そういえば初めてですね、お名前はなんと言うんです？」

「ン」、ソウダナ、レつたんトデモ呼ンデクレ」

「じゃあ私もボブで」

「ボブツチヤナ、ヨロシヤース」

「よろしくお願ひしますね、レつさん」

「よろしくレつたん。あたしは……まあ、初雪で」

「なんやこの名前を騙る流れは!!」

「ビツクウェーブニ乗ルンダジョージ！」

「ジョージやないわドアホ!!」

「それはそうとイイ匂いですねお二方」

「龍さん、そろそろひっくり返す時間じやない?」

「イイ時間ダゾ、ヒツクリ返スンダ、ジョージ！」

「お前出てけや!!」

その後、焼けたお好み焼きをレ級の顔面にぶん投げたがお皿でキャッチされてしまつた。

ドヤ顔が腹立たしくてもう一枚投げたら反応できずに顔面キヤツチしよつた。これは報いや、八つ当たりやないんや。

そんなこんなで今日も夜は更けていく。